

海外農業開発

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS

1990 9

- ネパール農業の最近概況
- ブラジル日系人の東南アジア胡椒探訪

社団法人 海外農業開発協会

目

次

1990—9

ネパール農業の最近概況..... 1

ブラジル日系人の東南アジア胡椒探訪..... 12

チリの日系人花卉事情..... 19

「海外農林業開発協力促進事業」制度のご案内..... 22

ネパール農業の最近概況

ネパールは国内総生産(GDP)の約60%、就業人口の約90%を農業および農業関連部門に依存している。同国の「1988/89年度経済白書」(88年7月～89年3月の実質推計)によれば、農業部門はGDP成長率で、穀物12.3%、商品作物11.5%の上昇であった。作物別ではそれぞれ米(粳)27.7%、とうもろこし18.9%、小麦11.4%、商品作物ではタバコ25%、じゃがいも13%、砂糖きび11%の増産であった。ジュートは20%増であったが、市場価格の低下から商品作物としての魅力が薄れ、作付減少の傾向にある。また、現在インドとの関係悪化からくる事実上の経済封鎖で、輸入肥料の不足、ジュート、豆類等輸出作物(主な輸出先はインド)の輸出市場の喪失、遠隔の開発地域における農業開発計画実施の遅れなど、農業生産への影響が出はじめてきている。

本稿は、今年2月から3月にかけて(財)海外農業開発協会がネパールの山野草の分布と花卉栽培の現状について調査したおりの報告書のなかから、最近の農業に関連する部分を中心に抜粋したものである。

国土と自然環境

ネパールの国土総面積は約14万7,000km²で北海道の約1.8倍、位置は北緯26度から30度、東経80度から88度にあたり、日本の奄美大島とほぼ同じ緯度である。国土の北はチベット、東・西・南はインドと接している。

(1)地形と区分

地形はヒマラヤ山脈沿いに東西に細長く約885km、南北の幅は145kmから240km。国土は地形によって山岳地帯、丘陵地帯及びタライ地帯の3地帯に分かれるが、開発地域としては、東部、中央部、西部、中西部及び極西部の5地域に区分され、さらに、極西部地域は2県、他の地域は各3県に細区分されている。

首都カトマンズは標高1,300mから1,400mのところであり、周囲を標高2,000mクラスの山に囲まれた盆地の底に広がる都市である。

山岳地帯は標高4,877mから、世界の最高峰エベレストの8,848mを含む北のチベット国境までの地帯で、面積は国土の1/3を占めている。この地帯の南部に耕地があるが僅かに2%にすぎない。

丘陵地帯は標高4,877mから610mまでに広がり、国土の中央部で東から西にまたがっている。カトマンズ盆地とポカラ盆地の2大盆地が発達、丘陵地帯の10%が耕地になっている。標高の低い地帯は亜熱帯気候であり、マンゴーやバナナ等が栽培されている。

タライ地帯は標高610m以下で、南はインドの平原と国境を接している。40%が耕地で土壌は肥沃、ネパールの穀倉地帯になっている。平原の北部には広大な森林地帯が残されている。

(2)気候

国土は狭いが、標高と複雑な地形のため気候も極めて複雑で、亜熱帯気候から極寒帯気候まで分布している。

モンスーンは6月中旬東部から始まり、年間雨量の60～80%がモンスーンによる。

雨期は6月から9月で、12月からは乾期になる。降雨量は一般に東から西へ移るに従って漸減し、タライ地帯より丘陵地帯が多い。国全体の年間降雨量は約2,200mmで、カトマンズは1,426mm、ポカラは3,747mmである。

気温は標高と地形によって大いに異なる。タライ地帯は亜熱帯気候で、丘陵地帯は亜熱帯から温暖地帯の気候、山岳地帯は亜寒帯から極寒帯の気候である。

カトマンズの最高気温をみると、4月から9月までの半年間は毎月ほぼ27℃内外で東京の9月の気候とはほぼ同じだが、12、1、2月の冬の3カ月の最高気温は東京より8～10℃高く、東京の11月、4月と同じである。冬の最低気温1～4月までは東京より2℃前後高く雪の降ることはない。カトマンズの冬は温暖である。

政治

ネパールは世界でも数少ない王国の一つである。1951年、故トリヴバン国王が100年余り続いたラナ家の執政に終止符を打ち、王制を復古、1959年には一時的に議会制民主主義が取入れられたが、翌60年に故マヘンドラ国王が政権を掌握。1961年には国王親政によるパンチャヤト制度(各レベルの議員任命権を事実上政府が握る翼賛的政治制度)が導入された。その後、政党を認めないパンチャヤト制度に対する国民の不満が高まりをみせる。1979年5月にカトマンズで大きな反王制暴動が起きるなど、治安状況が極度に悪化したため、情勢安定化を期しビレンドラ国王は1980年5月、政治体制を選択する国民投票を実施したところ、パンチャヤト制度支持が、政党制支持を上回った。1980年12月には、民主化を目指した憲法改訂が行われた。さらに、1981年5月には改訂憲法に基づき、国政史上22年振りに直接選挙制による国会議員総選挙を実施する等の民主化政策がとられた。1986年5月、第2回総選挙が実施され、国王親政体制は安定的に推移するかにみえたものの、1990年になり反王制運動が活発化し、現在のところ政情は不安定である。

ネパールは中国とインドの2つの大国にはさまれているが、伝統的に厳格な非同盟中立主義を掲げている。また、非同盟中立政策とならんで「ネパール平和地帯提案」を外交政策の柱としている。

日本とネパール2国間関係については、特段の政治的、経済的懸案はない。経済・技術協力にかかる、1988年度までの累計額は、円借款が353億円、無償資金協力が655億円、技術協力が160億円に達している。

経済

(1)経済成長

国内総生産の約60%は農業生産であり、就業人口の90%以上が農業及び農業関連部門に吸収される。このため、政府は1980年代に入って実施された第6次開発計画(1980/81～84/85年)、第7次開発計画(1985/86～88/90年)においても農業開発を最重点項目として掲げてきた。第6次開発計画では食糧作物は目標の98%、換金作物は73%の生産達成率であったが、ジャガイモのように目標の114%という増産が達成されたものもある。第7次開発計画では、人口増に伴う食糧増産のため、次のような増産目標を掲げている。

食糧作物	24%	豆類	8%	茶	74%
油用種子	23%	綿	84%	ジャガイモ	27%

かんきつ類 76% その他の果樹 28% 野菜 17%

1987/88年度の実質GDPは278億ルピーで、前年比9.7%という高い実質経済成長率を示している。これは、1986/87年度が気象災害(早魃・洪水)の影響で同2.7%に低下したが、1987/88年度は農業生産が回復したためとされている。1988/89年度はインドとの問題もあり、同1.5%位と予想されている。国民1人当りGDP(1987/88年度)は160ドルで、インドの半分であるが、ブータン、バングラデッシュとは同水準である。

産業別の市場価格によるGDPの割合をみると、農林水産業部門が約58%で、他の業種は10%以下である。GDPの伸びをみると、農林水産業部門が最も高い傾向を示している。また、鉱業を除く他の業種も大きな伸びを示し、なかでも製造業のうちの家内工業部門と、運輸・通信業のサービス部門(特に観光開発)の増加が目立つ。

(2)物価

消費者物価の推移を、カトマンズについて1972/73年の物価を100とした指数によって示したのが表1である。物価上昇の著しいものは、香辛料、野菜、肉、魚、卵で5.3~6.6倍の上昇。次いで豆類、食料品、穀物類、乳製品で3.7~4.5倍であった。タバコと砂糖は割合に値上り率が低く2.3~2.7倍であった。

農畜産物の小売価格の推移を表2に示したが、消費者物価と同様に、すべての価格が上昇している。1978/79年に比べ、10年後に価格が3倍以上になったものはタマネギ、ショウガ、羊肉及びオレンジであったが、他の農畜産物もすべて2倍以上に値上りしている。

ネパールでは交通網、流通機構の整備が不十分であるため、市場が各地域に分散している。地域別定期市場はタライ地帯の東部と中央部地域に最も多く、次いで丘陵地帯の東部と中央部に多い。タライ地帯の市場における農畜産物の小売価格は、インドとの取引が盛んに行われているため、インドの価格の影響を受けやすい。これに対して丘陵地帯やカトマンズでは自家消費の割合が大きいため、タライ地帯の価格とは異なった動きを示している。すなわち、タライ地帯では地域間価格差は小さいが、丘陵地帯では地域間価格差が大きい。

(3)貿易

ネパールの貿易は、一次産物を輸出し、工業製品を輸入するもので、一次産品としては農畜産物がほとんどである。品目としては米、ジュート、皮革、木材が主力で、トウモロコシ、香辛料、薬用植物、カーペット及び手工芸品等も重要な輸出品となっている。主な輸入品目としては工業製品と石油製品があげられる。

1983/84年以降、輸入額は輸出額の3倍以上となり、貿易不均衡が続いている。輸出入額は年々増加し、1987/88年には輸出が41億1,460万ルピー、輸入が138億6,960万ルピーで完全な輸入超過となった。※1ルピーは約5.2円(1990年3月時点)

貿易の最も重要な相手はインドである。輸出総額に占めるインドの割合は1974/75年には、83.9%であったが、それ以降のシェアは低下を辿り1987/88年には38.1%まで低下している。輸入においてもインドの比重は大きい。70年代後半には輸出同様にそのシェアは低下傾向を示している。輸入総額に占めるインドの割合は、1974/75年には31.3%であったが、80年代初めには51.3%に低下し、1987/88年には33.1%まで低下している。

日本への輸出は1987年で263万ドルに対し、日本からの輸入は7,930万ドルである。主な輸出品は植物性油脂、山羊皮、カーペット、薬用植物。主な輸入品は繊維品、機械機器、自動車及び部品である。

表1 消費者物価指数 (1972/73-100、カトマンズ市)

項 目	1978/79	1981/82	1984/85	1987/88
食 料 品	159.3	231.8	280.4	433.7
穀 物 類	136.6	184.2	239.4	372.3
豆 類	178.3	245.6	329.5	449.1
野 菜	205.2	325.1	348.9	569.6
香 辛 料	261.8	307.7	359.2	657.0
肉・魚・卵	186.6	296.2	364.0	526.6
牛乳・乳製品	141.3	198.7	242.5	366.5
砂 糖	120.5	232.9	205.6	273.7
タ バ コ	146.9	155.9	186.4	225.4

(出所) Statistical Year Book of Nepal, 1989

表2 農畜産物の小売価格 (ルピー/KG)

項 目	1978/79	1981/82	1984/85	1987/88
玄 米	3.39	3.94	5.28	7.00
小 麦	2.49	2.83	3.14	4.87
トウモロコシ	2.16	2.49	2.88	4.36
ジャガイモ	2.18	2.47	2.80	4.47
タ マ ネ ギ	2.94	4.42	4.84	8.73
ヒ エ	2.21	2.69	3.17	5.06
ト マ ト	4.32	4.96	6.75	10.97
トウガラシ (乾)	16.91	20.03	26.03	30.46
シ ョ ウ ガ	4.48	8.73	10.14	13.46
大 豆	3.86	4.86	6.17	9.53
鶏 肉	18.62	24.61	32.30	48.64
羊 肉	14.77	21.18	28.90	46.58
豚 肉	9.54	13.13	17.85	25.82
オ レ ン ジ*	0.60	0.82	1.26	1.85
レ モ ン*	0.33	0.69	0.55	0.69
牛 乳**	3.12	4.02	4.88	7.15
卵*	0.79	0.97	1.30	1.73

(注) * 1個当りの価格 ** 1ℓ当りの価格

(出所) Statistical Year Book of Nepal, 1989

農業概況

(1) 土地利用

国土面積に対する土地利用の推移は表3のとおりである。耕地面積は第6次開発計画で第5次より約3,000km²増加したが、現在(第7次)は減少し、国土面積の18%の26,533km²になっている。森林面積が最も多く37.6%の55,334km²である。草地面積はわずかに増えただけで19,785km²の13.4%である。その他は氷雪地、道路、河川などで31%を占めている。地帯別に見ると耕地のうちの約半数がタライ地帯に存在している。

(2) 食糧需給

人口増加にともない、食糧作物の国内需要は着実に増加してきている。約10年間にわたる食糧作物の需給バランスを表4に示した。同表にみられるように、水稻は1982/83年、1986/87年には不足したが、他の年は余剰がある。小麦は毎年余剰を生じている。トウモロコシ、ヒエ類、大麦は1984/85年以降需給バランスが保たれており、トウモロコシはわずかに余剰を生じている。

地域別にみると、東部、中央部、西部は、1985/86年までは、食糧に余剰があったが、1986/87年になると、余剰は東部だけ。中西部と極西部は毎年食糧不足を生じている。地帯別に見るとタライ地帯は食糧に余剰があるが、丘陵地帯と山岳地帯は食糧自給バランスが悪い。

ネパール政府は、前述したように、現在、第7次開発計画の目標達成のため、農業投入財(改良種子、化学肥料、農薬)の供給により、食糧作物の増産に努め、食糧需給バランスの改善を図っている。

(3) 農作物の生産動向

農作物の作柄はネパール特有の自然条件に左右されるが、特に、モンスーンの始まる時期の影響を受けている。灌漑の整備が遅れているため、降雨がないと乾燥による農作物の被害が大きい。農作物は統計上、食糧作物と換金作物とに大きく区分されている。食糧作物には水稻、トウモロコシ、小麦、ヒエ類(ヒエ、キビ、アワ、ソバ)及び大麦が含まれている。換金作物には油料作物(カラシナ、亜麻仁、ゴマ、大豆、落花生、棉)、ジャガイモ、サトウキビ、タバコ、ジュート、茶が含まれている。

イ) 食糧作物

ネパールの食糧作物のうち、水稻、トウモロコシ及び小麦が重要な3大作物である。最近5年間の生産量の推移を表5からみると、水稻は栽培面積で6.7%、生産量で8.2%とわずかな増加であったのに対し、トウモロコシは31.5%と18.5%、小麦は26.5%と17.5%という大幅な増産であった。これら3作物だけで食糧作物栽培面積の93%(水稻49%、トウモロコシ23%、小麦21%)、生産量の96%(水稻62%、トウモロコシ19%、小麦15%)を占めている(表6)。これからみても水稻、トウモロコシ及び小麦の重要性がわかる。

水稻はタライ地帯でネパール全土の70%台が生産されている。タライ地帯でも東部地域が最も多い。丘陵地帯は20%台の生産であるが、カトマンズ、ポカラ盆地に比較的多い。標高2,200mの高地まで栽培されている。

トウモロコシは、丘陵地帯と山岳地帯の住民の重要な食糧となっており、丘陵地帯で全体の70%、タライ地帯は20%、山岳地帯は8%の生産である。標高2,800mの高地まで栽培されている。東部、中央部の丘陵地帯が主産地である。

表3 土地利用の推移

単位: km²

項 目	第5次開発計画		第6次開発計画		第7次開発計画	
	(1975/76~1979/80)		(1980/81~1984/85)		(1985/86~1989/90)	
	面 積	%	面 積	%	面 積	%
1. 耕 地 面 積	23,260	16.5	31,268	22.2	26,533	18.0
2. 森 林	48,230	34.2	40,997	29.0	55,334	37.6
3. 氷 雪	21,121	15.0	21,121	15.0	22,463	15.3
4. 草 地	17,857	12.7	17,857	12.7	19,785	13.4
5. 河川・湖沼	4,000	2.8	4,000	2.8	4,000	2.7
6. 居住地・道路	300	0.2	300	0.2	1,033	0.7
7. その他	26,291	18.6	25,516	18.1	18,033	12.3
計	141,059	100.0	141,059	100.0	147,181	100.0

(出所) Handbook of Agricultural Statistics of Nepal, 1988

表4 食糧需給バランス (1977/78~1986/87)

単位: 1,000 t

年 次	水 稲	トウモロコシ	小 麦	ヒ エ 類	大 麦
1977/78	259	-14	85	-7	-11
1978/79	264	-23	90	-9	-11
1979/80	95	-203	106	-22	-11
1980/81	302	-51	130	-24	-8
1981/82	228	-71	147	-29	-14
1982/83	-187	-119	246	-34	-17
1983/84	302	-130	136	-46	-19
1984/85	82	5	9	0	0
1985/86	124	2	47	0	0
1986/87	-146	0.8	82	0	0

(注) 食糧需給バランス=生産量-需要量

(出所) Statistical Year Book of Nepal, 1989

表5 主要農作物の生産量の推移

単位: 面積 1,000ha、生産量 1,000t

年 次	水 稲		トウモロコシ		小 麦		油料作物		ジャガイモ	
	面 積	生産量	面積	生産量	面積	生産量	面積	生産量	面積	生産量
1983/84	1,334	2,757	504	761	472	634	111	73	59	383
1984/85	1,377	2,709	579	820	452	534	128	84	66	420
1985/86	1,391	2,805	615	874	483	598	138	79	70	357
1986/87	1,333	2,372	627	868	536	701	143	83	74	395
1987/88	1,423	2,982	674	902	597	745	151	94	80	567

(出所) Handbook of Agricultural Statistics of Nepal, 1988

表6 農作物の地帯別栽培面積と生産量 (1987/88)

単位: 面積 1,000ha、生産量 1,000t

()内は%

作物名		山 岳		丘 陵		タ ラ イ		ネパール全土		平均 収 量 (t/ha)
		面 積	生産量	面 積	生産量	面 積	生産量	面 積	生産量	
食糧作物	水 稻	35.5 (2.5)	65.3 (2.2)	337.9 (23.7)	667.4 (22.4)	1,049.9 (73.8)	2,249.1 (75.4)	1,423.3 (100)	2,981.8 (100)	2.10
	トウモロコシ	53.4 (7.9)	72.3 (8.0)	482.9 (71.7)	621.5 (68.9)	137.5 (20.4)	207.7 (23.0)	673.8 (100)	901.5 (100)	1.34
	ヒエ類*	23.5 (14.3)	21.8 (14.5)	127.9 (77.7)	115.9 (77.2)	13.3 (8.1)	12.4 (8.3)	164.8 (100)	150.1 (100)	0.91
	小 麦	40.6 (6.8)	38.7 (5.2)	242.9 (40.7)	272.1 (36.5)	313.3 (52.5)	433.8 (58.3)	596.7 (100)	744.6 (100)	1.25
	大 麦	11.1 (38.1)	9.4 (38.5)	14.5 (49.8)	11.9 (48.8)	3.5 (12.0)	3.1 (12.7)	29.1 (100)	24.3 (100)	0.83
	小 計	164.1 (5.7)	207.5 (4.3)	1,206.1 (41.8)	1,688.8 (35.2)	1,517.5 (52.6)	2,906.1 (60.5)	2,887.7 (100)	4,802.3 (100)	
換金作物	油料作物**	2.2 (1.5)	1.2 (1.3)	28.3 (18.7)	16.9 (17.9)	121.0 (79.9)	76.3 (80.8)	151.5 (100)	94.4 (100)	0.62
	ジャガイモ	18.8 (23.4)	122.5 (21.6)	42.6 (53.1)	276.1 (48.7)	18.8 (23.4)	168.3 (29.7)	80.2 (100)	567.0 (100)	7.07
	サトウキビ	0.2 (0.6)	2.2 (0.2)	2.2 (7.4)	36.3 (4.5)	27.2 (91.9)	775.8 (95.3)	29.5 (100)	814.4 (100)	27.59
	タバコ	—	—	0.2 (3.0)	0.1 (2.2)	6.3 (96.9)	4.4 (97.8)	6.5 (100)	4.5 (100)	0.69
	ジュート							14.5	15.8	1.09

(注) * ヒエ類にはキビ、アワ、モロコシ、ソバも含まれる。

**カラシナ、亜麻、ゴマ、落花生など

(出所) Handbook of Agricultural Statistics of Nepal, 1988

小麦は水稻とトウモロコシに次ぐ重要な冬作物である。小麦の栽培面積のうち、53%がタライ地帯で、丘陵地帯は41%を占めている。一般に、水稻の裏作物として栽培されている上に、トウモロコシより標高の高い所でも栽培が可能であるため、栽培地帯は標高3,000mまでの広い範囲にわたっている。山岳地帯のチベット系住民は、小麦を輪作作物として重要視している。

ヒエ類はネパール全土の食糧作物栽培面積のうち、6%という少ない割合であるが、標高の高い丘陵地帯と山岳地帯の住民にとっては、極めて重要な作物である。ヒエ類の生産状況は丘陵地帯が77%、山岳地帯が14%でタライ地帯はわずか8%である。標高3,000m以上の地帯でも栽培されている。

大麦の生産は食糧作物のうちで最も少ない。その栽培面積は作物栽培全体の1%、生産量は同0.5%に過ぎない。地帯別生産は丘陵地帯で50%、山岳地帯で38%という状況である。地域としては中西部と極西部に栽培が多い。

ロ) 換金作物

ネパールにおける換金作物は、国内供給の他に対貿易品目として重要な役割を果たしている。換金作物の栽培面積は全農作物の栽培面積の約9%で28万2,000haであり、生産量は全体の約24%で149万6,000tである。

表7 化学肥料使用量

単位：t

項 目	1983/84	1984/85	1985/86	1986/87	1987/88
チ ッ ソ	28,058	31,656	31,698	32,910	37,300
リ ン サ ン	8,463	10,623	11,053	11,936	15,121
カ リ	779	550	657	208	1,062
計	37,300	42,829	43,408	45,054	53,483

(出所) Handbook of Agricultural Statistics of Nepal, 1988

油料作物の栽培面積は15万2,000haで、その80%がタライ地帯で生産されている。油料作物としてはカラシナが主力で次は亜麻仁、その他は極めて少ない。地域としては中央部から中西部に生産が多く、カラシナは小麦と同じく水稻の裏作としての栽培が多い。

ジャガイモは換金作物として栽培されているが、食糧作物としてネパール全域に栽培されている。山岳地帯の重要な食糧作物であり、地域としては東部、中央部の丘陵地帯が主産地で、標高3,000m位まで栽培されている。栽培面積は年々増加し8万haに達している。サトウキビは経済的に最も重要な換金作物で、換金作物の中で生産量が最も多く約3万ha、81万4,000tの生産となっている。栽培はタライ地域の全域にみられ、同地域の栽培面積は全体の92%、生産量は95%を占めている。タバコの栽培面積は6,500haで、タライ地帯全域で栽培されているが、東部と中央部に集中している。栽培面積は1986/87年より減少している。ジュートは重要な換金作物であり、輸出用として栽培されている。産地はタライ地帯の東部地域に集中している。1880/87に5万haもあった栽培面積が1万5,000haに低下している。茶は東部地域のタライ地帯の東の限られた地方に栽培されているにすぎない。栽培面積も約1,300haである。

各農作物の1ha当りの収量を表6からみると、一般に単位当たり収量が低い。このため、増収対策として改良種子の利用、化学肥料及び農薬の利用の普及が図られている。改良種子の普及状況は1987/88年で、水稻が212t、小麦が2,243t、トウモロコシが96tとなっている。化学肥料の使用量は1986/87年の4万5,000tから1987/88年には5万4,000tに増加している(表7)。

上述の農作物の他、ヒヨコマメ、ヒラマメ、エンドウなどの豆類が、1987/88年で26万5,000haも栽培されている。香辛料作物(ニンニク、チリペパー、ショウガ、ウコンなど)と野菜は1981/82年の統計では、それぞれ5万8,000haと1万7,000haとなっているが、第7次開発計画で1989/90年の野菜の生産目標は87万tである。野菜の産地は、主として都市周辺にみられ、バザールへ各種の野菜が出荷される。

山野草の分布と花卉栽培の現状

(1)山野草の種類と分布

山野草の種類と分布については、カトマンズ盆地の北の山(シバプリ山、標高2,716m)と南の山(ポルチョーク、標高2,931m)を調査した。調査時期が3月上旬であったので、開花中の山野草は少なく、発芽したばかりのものや、生育初期のものが多かった。開花中の山野草は、シャクナゲ(赤色と薄い桃色のみ)、デンチョウゲ、ミツマタ、スマレ、ラン(1種のみ)、野生の桃、ナシ他数種類であった。カトマンズ市内のゴダワリ植物園及び民間種苗会社園場で調査した結果、表8に示す草花が栽培されていた。

表8 カトマンズ盆地の栽培草花

植 物 名	開花期	植 物 名	開花期
アリ・マコイデ	2月～4月	ビシグストン・デージ	3月～5月
キンセンカ	2月～4月	美女撫子	3月～5月
ハイジー	1月～3月	帝王貝細工	3月～5月
スイートピー	2月～4月	カッコーアザミ	3月～6月
キンギョソウ	2月～5月	ツツジ	2月～3月
キンレンカ	1月～4月	ペチュニア	3月～6月
ストック	2月～3月	スイートアリッサム	3月～4月
美女桜	2月～5月	カラシナ	2月～3月
ケシ	2月～3月	ボケ	2月
ハナビシソウ	3月～5月	リンゴ	3月
ガザニア	3月～4月	モモ	3月

(出所) 調査団作成



西部ネパールの山草

ヒマラヤ山系の山野草の種類は約1,500種紹介されている。このうち「ヒマラヤの花」として、代表的と思われる4種類をとりあげ、それらの分布状況を表9に示した。ケシの花色がブルーのものは「青いケシ」といわれ、日本でも有名になっている。カトマンズは冬が温暖であるため、これらの草花の開花期が、日本と比べて1～2カ月早いようである。

ヒマラヤの山野草の所管官庁は、森林・土壌保護省薬草局である。薬草局によると、山野草の採集は、自生地 of 生育株の6～9割まで可能とされている。ランの花は採集ができるが、根株は採集できない。商業的に大量に採集するときは、申請書を薬草局長に提出し、承認を得ればよいとされ、自然保護に対する考え方は、日本より遙かに寛大である。

(2) 花卉栽培の現状

カトマンズ市内では、官公庁、ホテル、レストラン、公園、住宅の庭園の花壇に多くの草花や花木がみられるが、いわゆる花屋はみられない。草花は各所のバザールで売られている例が多いが、そのほとんどは寺院参拝のオりの献花として利用されている。商業的花卉栽培例は少なく、カトマンズ近郊のゴダワリ地区で、種苗会社が各種草花の苗と鉢物の生産販売を行っている程度である。カトマンズ市内で栽培されている草花の生育状況からみて、カトマンズ近郊における、草花の栽培は可能と思われる。

表9 山野草の種類と分布

植 物 名	地 域	標 高 (m)	開花期 (月)	花 色
Meconopsis (ケシ)				
Meconopsis bella	中部	3,500~5,000	6~9	ブルー
" discigera	西部	3,300~4,500	6~7	クリーム
" grandis	西部	3,300~4,500	6~7	ブルー
" horridula	西部~東部	3,500~5,500	7~8	ブルー
" napaulensis	西部	3,000~4,500	6~8	赤紫
" paniculata	東部	3,000~4,000	6~8	黄
" regia	中部	3,600~4,300	6~7	黄
" dhwojii	中部	3,600~4,300	6~7	黄
" lyrata	中部	3,000~4,300	7~8	ブルー
" sinuata	中部	2,700~4,300	6~7	紫
" villosa	東部	2,700~3,600	6~7	黄
Primula (サクラソウ)				
Primula aureata	西部~中部	3,600~4,300	4~5	黄
" barnardoana	東部	3,600~4,500	5~7	黄
" boothii	東部	2,400~3,400	4~5	紫
" colderana	東部	3,600~4,800	6~7	黄
" capitata	東部	2,800~4,300	6~9	紫
" denticulata	西部~東部	1,500~4,500	4~6	ピンク
" floribunda	西部	800~2,000	4~7	黄
" geraniifolia	中部~東部	2,700~4,500	5~7	ピンク
" glomerata	西部~東部	3,000~5,000	8~11	紫
" sikkimensis	西部~東部	3,300~4,400	5~7	黄
" edgeworthii	西部~中部	2,100~3,600	4~5	紫
" uniflora	東部	3,800~4,300	6~8	ブルー
" wigramiana	西部~中部	3,600~4,400	6~7	クリーム
" wollastonii	中部~東部	3,600~4,800	6~7	紫
" involucrata	西部~中部	3,000~4,500	6~8	白
" drummondiana	西部~中部	3,300~4,000	6~9	ブルー
Viola (スミレ)				
Viola wallichiana	中部~東部	2,100~3,000	6~7	黄
" kunawarensis	西部~中部	3,000~4,700	5~7	紫
" canescens	西部~東部	1,500~2,400	3~5	紫
Rhododendron (シャクナゲ)				
Rhododendron arboreum	西部~東部	1,500~3,600	2~5	赤
R. barbatum	"	2,400~3,600	4~6	赤
" campanulatum	"	3,000~4,400	4~6	ピンク
" falconeri	東部	2,400~3,300	4~5	黄
" hoagsonii	"	3,000~3,800	4~5	ピンク
" thomsonii	"	3,000~3,800	5~6	濃赤
" wightii	"	3,600~4,300	5~6	黄
" unnabarinum	"	3,000~3,600	5~6	ピンク
" dalhousiae	西部~中部	2,000~2,500	5	紫
" lindleyi	東部	2,100~3,300	5	ピンク
" anthopogon	西部~東部	3,000~4,800	5~6	黄
" camelliiflorum	東部	2,700~3,600	6~7	ピンク

(出所) Flowers of the Himalaya (Oleg Polunin & Adam Stainton) 1986

ブラジル日系人の東南アジア胡椒園探訪

1 マレーシア

マレーシアは13州から成り立つ連邦国で、主都はクアラルンプール、東部マレーシアを含めた人口は約1,200万人、面積は33万平方キロで日本の北海道を除いた面積に等しい。

この国はマレー系50%、中国系40%、インド系他10%となっており、イスラム教徒の信者が非常に多い。

最近、特に華僑が勢力を伸ばし、中心的役割を担うようになったが、まだまだ彼等に対して、教育、就労、福祉の分野において、問題が残っている。

日本からも円高対策などのために、日本企業が進出の一途をたどり、日本人の数も5,000名を越えるようになった。

通貨はリンギットと呼ばれているマレーシア・ドル（以下マレーシア・ドルをM\$で示す）で、1米ドルは2.4M\$。これを日本円で換算すると現在のところ、大体53円前後となっている。

さて、少し前置きが長くなったが本題に入ることにする。

日本を出発したジャンボ機が機首を下げ始めると、前方には雲の間から淡路島程度のシンガポール共和国が見えかくれしている。

世界で最も清潔で機能的な国際空港と太鼓判を押されたシンガポール・チャンギー国際空港に到着した。

南洋らしい雰囲気と、ココヤシの木々が印象的で、ブラジルとは違った雰囲気を醸し出している。

<ジョホール州>

まず、シンガポール経由で、マレーシアへの入口といわれているシンガポール対岸のマレーシア領ジョホール州の州都であるジョホール・バルーへ渡った。

その近郊のコショウの産地を最初に見学した。

案内はエスビー食品の尾久哲史農場支配人である。

当地方は同政府がデンデ椰子、カカオ生産に力を入れており、ゴム園やパイナップル園も多く、そういった作物の中にコショウ園があるといった程度で、コショウの産地としては大きくなかった。

マレーシアはイスラム教徒の国なので、旅行中思いがけないことに会える場合が多かった。

その中でもブラン・プアサという断食シーズンにぶつかった。

断食の1カ月は、日の出前に食事をとり、日没後の食事まで日中は水を飲んでもいけない。煙草さえもである。

だから、はじめの1週間は相当いらいらするらしい。

学生の中には「家ではプアサだが、外では…」と、苦笑いしながら、こっそり食堂に入る者もいたから、インテリ層ではだいぶ崩れているらしい。

また、日中は断食するが、日没前から日の出までは、ふつうよりも御馳走を食べたりするので、かえって体重が増えることもある。

そういった光景にぶつかり若干面食らった以外は順調に回ることができた。

ちなみに、イスラム教徒の国では宗教的タブーに十分注意したい。

例えば、彼等と食事をともにする場合、豚肉料理の注文は避けること。

左手は不浄の手とされているので、絶対に左手では握手をしたり、ものを手渡したりしてはいけない。

特に信仰心が厚いので、祈りの最中に邪魔になるような行為は慎むこと、静かに立ち去るくらいの心がけがほしい。

そのほか寺院に入るときは、土足厳禁。宗教的な儀式や場所を写真撮影するときには、前もって許可を得ること。

特にマレーシア、インドネシアへ旅行する場合は、前記の事項に注意すればスムーズに旅行が出来るのである。

次に訪れたのは同州サーレン地方で、その道程に車を走らせると長いゴム園が続き、道端には果物の王様といわれているドリアンをはじめ、マンゴスチン、ランブータンなど熱帯果物をズラリと並べた売り子に何回も出くわした。

果物の王様といわれるドリアンなどは東京のデパートで1個1万円もするのが、ここでは大きさによって1個2M\$~5M\$で手に入れることが出来る。

そういった取り立ての果物には新鮮すぎて虫が着いたのも多いが、それがまた食欲をそそるのである。

さて、ここでは華僑の模範的コショウ農場を見学することが出来た。

最初に訪れたのは同地に移住して52年になるチャイさんの農場で、2.8ヘクタールの土地にコショウ樹(12~16年木、4,000本)を栽培している。

コショウ樹に使用する支柱は3.3メートルの長めのものを利用していた。

ここで一番感心したのはコショウ樹の根元管理の素晴らしい点で、水はけを充分に考慮して心土(腐食物がない)を高く盛り上げ細心の注意が払われており、しかも消毒は2カ月に1回という徹底ぶりであった。

消毒方法も畑にある肥料と労働者小屋をうまく利用して貯水タンクを設置し、移動式ポンプで消毒するという。

華僑らしい創意工夫が見られ、設備投資額もブラジルのように大型機械を駆使する方法に比べ実に経済的であった。

肥料は3要素(12-12-17)に2%の微量要素を加え、1本当たり700~800グラム施していた。

販売方法は、青コショウの庭先渡しが1キロ当たり1米ドルであった。

次に訪れたのは、やはり同地の華僑のホンファンさんの農場であった。

ホンファンさんは2,000本の新植と3年木3,000本の計5,000本のコショウを栽培している。植栽間隔は231×231センチで、等高線状のいわゆる段々畑に表土の流失を防ぐために1本1本溝が掘られ、きめ細かい管理が行われていた。

特に根元は苗が露出するまで穴を掘り、直射日光を当て消毒するという方法を実施しており、それはいい勉強になった。

この両農場のコショウ園を見て痛感したのは根元管理の重要性である。

畑には病気が部分的には見られたが、それほど広がってはいない。それは青コショウ収穫で樹を痛めていないことも考えられるが、やはり年6回の消毒等、行き届いた根元管理に起因し

ていると思う。

このような見事な管理で、たしかにコショウの寿命は延びているが、ただちに増植とはいかないようだ。

なぜなら現在、両農場共に支柱を100キロ離れた所から2米ドルで購入しているように、生産資材が割高であることと、土地購入の制限があるためである。

<サラワク州（北ボルネオ）>

東部マレーシアはボルネオ島の北半分を占め、その中には世界有数の富める国ブルネイ国をはじめ、サバ州、サラワク州の2州がマレーシア連邦に属しており、その内のサラワク州ではコショウ栽培が盛んで、1大生産地を形成している。

その中でも同州西部に位置する代表都市クチンの近郊コショウ農家を訪問した。

同地はシンガポールの東方、カリマータ海峡を隔てた約700キロの所に位置し、飛行機で1時間弱である。

同地のコショウ生産量は平均すると15,000～16,000トンとなっている。

同州の人口は約160万人。人口構成は中国系31%、イバン系29%、マレー系19.5%、レンダヤ系9%、その他で、平均給与は高卒程度で公務員が116米ドル、民間が104米ドルでブラジルと大体同じくらいのサラリーである。

同州の土地利用は相対的に山間部分に等高線状に畑を作り、傾斜の強い場所にコショウ、低地にカカオを栽培している。

サラワク州はカリマンタン(インドネシア領)に隣接しており、オランウータンや黒い蘭を見ることが出来る。

クチンでは、レストラン経営者の酒井和江さんの案内でまわった。

最初に訪れたのがマレー人のコショウ園で、経営内容は700本栽培であった。

収穫時期は例年4～5月だが、今年は1カ月以上遅れているとのこと。

去年の収穫量は300キロであった。

2軒目の農家は3,000本栽培。主人の話では「今年は収穫量が多い」とのこと。

根元の管理はジョホール州の農家同様、管理が行き届いていた。

収穫労賃は現在、女性で2.9米ドル(1日分、1988年5月現在)、支柱購入額は1本当たり2.5米ドルとなっている。

さて、次に訪れたのは、クチン市から南東約50キロのところにあるセリアン市である。

同地もコショウの産地を形成しているが、今年は全般的に収穫が遅れており、6、7月にずれ込んでいるようであった。

最初に訪問した農家はコショウ3,000本(10年もの)を栽培し、肥料は1本当たり1キロ使用しており、主人は「在庫が少なくなる12月頃が良くなるのでは」と期待していた。

当農家では丁度しりのコショウを販売していたが、値段は黒2～2.9米ドル、白5～5.8米ドル(庭先販売)程度とのこと。

次に訪問した農家はコショウ1,400本を栽培し、10年樹で去年の収穫量は3トンであった。

88年度の収穫量は去年より向上しており、販売値は「いい時は黒1キロで4米ドルだったのが、今では2.8米ドルに下がった」とのこと。

3軒目は華僑の農家で3,000本のコショウを栽培していたが、主人は「華僑は土地を買えないので借地農業をしている。

借地代は10年契約で 2,000米ドル近くにもなるので、今後コショウの値段が下がると大変だ」と話していた。

その後、クチンに戻り、華僑で輸出業を営む林慶賢さんと、半官半民の公社(コショウの輸出許可、製品の規格等を統制している)を訪ねた。

林さんは年間 300～ 350トンのコショウと 5,000～ 5,500トンのカカオを扱っている大きな輸出業者である。

今年の収穫量が地元の農家の話では、やや上向きとのことであったが、当主人も「去年のサラワク州の生産量は15,000トンで、今年は 1,000トンぐらい増えるだろう」と、同様な意見であった。

さて、16年前に設立されたという公社では、職員から「88年度のマレーシアの生産量は、16,000～16,500トンぐらい期待できる」との話を聞いた。

周知の通り、サラワク州のコショウ生産割合は例年、黒7割、白3割であるが、今年は白の値段が黒に比較して良かったことから、今後の白コショウ市況の動き次第で白ピメンタの生産が増えるものと思われる。

したがって、最終的には黒が6割、白が4割の比率になる可能性があるといえる。

2 インドネシア

インドネシア共和国は、赤道をはさんで北緯6度から南緯11度までの約 1,900キロ、東経95度から 141度までの約 5,100キロの間に、13,600有余の島々(うち人が住んでいるのは約1,000の島々といわれる)からなる。

その総面積は約200平方キロで、日本のほぼ 5.5倍である。

人口は約 1億 7,000万人で、スマトラ島からジャワ島、イリアン・ジャヤ(西イリアン)までの東西の距離が 6,000キロもあるので、アメリカ大陸のそれにほぼ匹敵する。

人口構成はイスラム教徒87%、中国系4%、その他となっており、公用語はマレー語を母体としたインドネシア語、ジャワ語、スンダ語等、約250種類の地方語がある。

高温多雨の熱帯性気候に属する気候は乾期(4～9月)と雨期(10～3月)に分けられ、年平均気温は24～27度で、寒暖の差は3～4度と小さい。

インドネシア共和国は、1950年8月17日に正式な独立宣言が行われた。

以来30有余年、アセアンの中でもっとも有力な国として、近代化が進められてきた。国名の由来は地理学用語でインドに続く島々という意味。

現在の同国の平均給料(1ヵ月)は高卒の公務員が37～43米ドル、商社で123米ドル、大卒公務員が61米ドル、商社で 480米ドルとなっている。貨幣単位はルピア。

<バンドルランボン州>

最初の視察地はコショウの立木栽培として有名なスマトラ島南部、バンドルランボン州コタプミゲン。

赤道直下にあたり、面積は47平方キロ、世界で6番目に大きい島である。

シンガポール、マレーシアからの国際線の空路もあり、所要時間はどちらも1時間程で主要都市へ乗り入れている。

珍しい動植物が数多く棲息する大自然が残され、特に、同島北部にあるトバ湖はインドネシア最大の湖で、世界中からの観光客でにぎわっている。

また、天然資源が豊富なので「希望の島」と呼ばれている。

産物としては石油、ゴム、ヤシ油、茶、タバコ、サイザル麻などがあり、メダンスマトラ最大の都市で商業の中心的役割を持ち、街並にはオランダ統治時代の面影を残している。

さて、ここの案内役は、旅行社に勤める添木野冬子さん。

コタブミグンは東南アジア特有の人口密度の高い、細分化された土地での農業形態であり、1,500ヘクタールの面積に500あまりの農家がコショウを栽培していた。

1戸当たりの収穫量は多い年で600キロ、去年は350キロ程度とのこと。

立木栽培の長所は平均寿命20年というように栽培期間が長いことであるが、一方で収穫開始が植え付け後4年と遅い、天候に左右されやすい等の欠点がある。

そのため、当地でもコショウの高値がきたからといって、直ちに増植、増産とはいかないようである。

訪問した農家の主人は「最近、コショウの成りが悪い。しかも新植する場所もない」と、悲観的であった。

また、地区のまとめ役である村長は「自分も2,000本のコショウを栽培しているが、取り分は労働者と半分半分、もうけが少ない。販売も自分たちが独自でやりたいのだが、華僑の輸出業者に完全に握られていて思うようにいかない」と話していた。

ちなみに、現在の販売値は黒で1キロ当たり2.1米ドルであった。

<バンカ島>

バンカ島は南部スマトラの東方50キロ弱にあり、小さな海峡を隔てた人口50万の島である。

島全体の4割が華僑が占められ、当地はコショウの代表的産地で、白9割、黒1割の比率となっている。

島内には4～5キロごとに100～200戸の部落が点在している。

道端には多くの露店があり、それは単に路上に物を並べたにすぎないもの、屋台のようなものときまぎらで、天秤棒をかついだ物売りも多い。

いかけ屋風のものから、ほうきや枕など日常生活のありとあらゆるものが売り歩かれている。

「ミニャー」と鼻にかかったような声が尾を引くのは油売り、「クエー」という呼び声は菓子屋さん。

竹筒をたたき、笛で合図する物売りもいて、声ひとつ、合図ひとつでわかるようになればインドネシア人になれるであろう。

暑い昼さがり、余韻あるその声や音を聞いていると「昔の情緒」？ すら感ずるところのものがある。

さて、最初に訪問したのはインド人のサバンさん（熱心なイスラム教徒）の農場。

コショウは約2万本管理しており、当地でも有数の大規模生産者である。

畑は良く手入れがされており、ブラジルにあるコショウ園とそっくりであった。

あまりに、きれいだったので、主人にどのくらいの収穫量があるのか、尋ねると、逆に「この園ならどのくらい穫れると思うか」と聞き返された。

おそらく50～60トンだろうと話したら、なんと去年は7トンしか取れなかったという。

今年は15トンくらいだろうとの答えが返ってきた。

樹の大きさの割には、かなり実の成りが悪い。

肥料は1本当たり 500～700グラム施し、労賃は1日3米ドル(食事付)でブラジルよりも高

い。

販売値は昨年在白1キロ当たり 5.6米ドル、今年は 3.7米ドルぐらいと予想していた。

2軒目は村落で特別きれいな家があったのでそこを訪ねた。

主人の話では「500本コショウを管理しており、去年は 500キロしか取れなかったのにもかかわらず、この金を全部新築に注ぎ込み、無理な投資をしたので、今年の収穫で埋め合わせたいが、残念ながら今年は雨が多いせいか成りが悪い」と見ている。

バンカ島各地の農場を回ってみると、全体的に化学肥料の使い方が多く、その中でも特に値段の安い尿素の施用過多の畑が見うけられた。

まるで野菜のようなコショウ樹があった(樹の大きさの割に実が少ない)。

また、管理面から見ても、マレーシアのコショウ園と比較して悪く、特に根元の管理に差が見られた。

そのために畑のあちらこちらにブラジルと同じような病気が出ており、農家の人の話では「3〜4回収穫したら枯れてしまう」という。

バンカ島のコショウ栽培も常に病気という不安を抱えた経営が続いている。

そこで、今後のコショウ栽培の展望を聞くために、当地の農業指導機関である農務局を訪ねた。

しかし、ちょうどインドネシアの大みそかの時期にぶつかり、仕事がストップしていたために、詳しい話は聞けなかったが、それでも何人かの役人に「コショウ値下がり時の対策、第2作物の導入等」の質問を浴びせたが、あまり興味を示さなかったし、コショウ栽培について、根元管理等栽培上の指導にはあまり気をつかっていないように感じられた。

おわりに

今回、駆け足で東南アジアのコショウ産地を視察して強く感じたことは、ブラジルと比較した場合に、ブラジルのコショウ栽培は色々な面で恵まれており、特に豊富な土地を持って農業に打ち込めるという利点である。

東南アジア諸国は人口密度が高く、土地入手に制限があり、現状では1〜4ヘクタールの細分化された農地を持つのがやっとなのである。従って、たとえコショウの値段が急騰したからといってすぐに増産できない。特にスマトラ島ランボンのように天候に左右しやすい立木栽培ではなおさらだ。

今後、順調に生産が進んだとしても、東南アジア諸国の増産は10〜15%程度と考えられるので、ブラジルの生産者にとっては、それほど怖い相手ではないようだ。

世界のコショウ生産動向を見る場合は、東南アジア諸国よりも、むしろインドの天候、新植状況およびブラジルの増産、管理状況等を見た方が手取り早いし、確実であろう。

今日のように国際情報が確立した社会で、世界の需給動向等の情報を収集することは極めて重要であるが、一方、我々生産者はただその情報だけを鵜呑みに一喜一憂するのは危険である。それ以上に我々が実際に畑にある作物をしっかりと管理し、増産に力を注ぐことが大切であろう。

今後のコショウ値の見通しは7、8、9月は需要量が不足気味で値段の大幅な下落はないと見ている。

下半期も販売努力により現状維持をはかり、コショウ栽培に取り組みたい。

付記

この報告書を取りまとめて幾月か経過した今日、世界のコショウ市況が大きく変動している。それは大げさに表わせば、あっという間に値が下がり始め、状況は悪化の一途をたどっている。

9月に入り、CACEXが等級に応じて1,800米ドル(アスタークラス)から、1,600米ドルまでの最低値をつけ、これ以上の値崩れを押さえた。

そもそも、この下落の引き金となったものは、本年(1989年)7月にスイスで開催された世界コショウ生産国会議での本年生産見込み量の発表に起因する。すなわち、世界コショウ消費量の15万トンに対し、収穫量が16万トンと、1万トンの剰余を公表したことによる輸入国の買い控えによるものである。

今後、どの程度まで輸出国が輸入国の思惑に踊らされることなく、販売して行くかが下落歯止めのキーポイントになるだろう。

世界第2位の生産量を誇るブラジル(3万5,000トン)は、年内にも1万5,000トンのコショウを販売しなければならない状況に直面している。

我々生産者が農業経営で生き残る道は、融資に頼らず、自己資金で営農すること、あるいは作物の多角化を図り、安定した換金作物の維持を可能とすることであろう。

コショウ生産者にとって一番苦しい時期にさしかかっているが、コショウ園を安易に廃園することなく、上りの周期まで何とか維持管理していただくことを強く願うものである。

本稿はアグロ・ナッセンテ出版の許可を得て「アグロ・ナッセンテ」1989年1、2月号(第43号)の記事中、「東南アジアのコショウ園探訪」(筆者 上杉 嘉幸氏)を転載させていただいた。



チリの日系人花卉事情

前回チリから帰ってきた時、某開発女子青年から質問された。

「チリの山はどのようにしてできたかご存知？」と。

「そりゃあ、あのアンデス山脈は、何億年から何千万年にかけて海底から噴き出して出来たんだよ。だからブラジル側は、アマゾン川が出来、なだらかな丘陵地帯が出来たんさ」

と、私が答えると、彼女に、

「チリも積もれば山となる」

思わず「やられた」という感じだった。南アメリカ諸国で暮らすには、こうしたユーモアも大事なのである。

では、皆様にご質問いたします。

「チリの花生産者はどういった状態にあって、何を栽培しているのでしょうか」

少し頭を柔らかくして、簡単に考えてみてください。

正解は「チリデリバラバラ」

難しかったですか？ この冗句とまったく同じように日系人の花生産者である農家は、コロニアを形成せず、あっちこちに散らばっている。主要花卉はバラではなくダリアである。もちろんキク、カーネーション、バラ、グラジオラス等の切花、観葉植物、ラン類、アザレア、プリムラ等の鉢物もあるが、なぜ、主要花卉はダリアなのか。

花の市場へ行くと、ダリアで花輪を作っている光景をよく見かける。

具体的に述べていこう。花生産は、日系人もチリ人もやっている。それらはサンチアゴから100キロ圏内に点在する。主な生産地は、QUILLOTA（キジョタ）である。

□観葉植物の栽培と花・野菜の採種

サンチアゴを発って、パンアメリカン道路を北へ向かうと、だいたい70キロ地点に有名な曾根さん兄弟の農場がある。彼らは、観葉植物の栽培と某種苗会社と提携して花と野菜の採種をしている。弟さんは輸出会社も経営していて、農場は全部で10万平方メートル。後で知ったのだが曾根さんの家は、父親の代からかなりの政治力があつたらしく、大統領や閣僚関係者とも接触があるようで、チリ日系人の第一人者とみられている。花卉栽培者というより事業家へ転身しているといった方がいいのかも知れない。

パイプ設備とアンデスからの流水をうまく利用した栽培をし、雇用者は常時60人以上。女性労働者は使わないようにしている。理由は女三人寄るとかしましくなるからだそうだ。また、出産・産休等で、あてにできないという。だが、交配と採種を行う時には、彼女らの手が多数必要となる。やはり細かい手作業は女性なのである。

曾根さんのところでは、農場の事務所がホテルのフロントのように大きくゆったりと作られている。農場も比較的きれいに整備されているし、事務所の雰囲気、机の配置、空間のとり方、室内装飾も見事である。

また、発泡スチロールの鉢は、サイズと形がいろいろとある。これは軽いから大量に輸送し

やすいという利点があるらしい。

□アゼレア主体の鉢物

金森さんは、父親が日本人で、オランダ人の母を持つ混血である。顔つき体つきはオランダ人そのものであるが、頭の使い方は日本人に近いように思われた。アゼレアを主体とした鉢物生産をしているが、別に共同経営者が食用アスパラガスを栽培し、それを北アメリカに輸出している。1ヘクタール当たり6,000米ドルの利益があるという。

鉢物経営とアスパラガス生産者が結び付くのは一見不思議に思われるが、それは金森さんが共同経営者の向うでのアスパラガス信用に便乗して、将来、花卉を北アメリカへ輸出しようという計画を持っているからであろう。

“信用”を得ているということは、次に別な農産物を輸出する時に都合がいい。向こうから、いろんなアドバイスをもらえることができるからだ。

□菊の切花栽培

婦気（ふけ）さんは菊の切花栽培で、アメリカから持ってきた大輪系のディグニティ（白と黄）という品種だけを約20万本植付けている。農場内の労働者は常時15人。

販売は9割が庭先販売で、1本が8～10ペソ（90年7月現在1米ドル＝311ペソ）、値がいい時は80ペソになり1パコtte（50本）で2,500ペソ。加えて1割の手数料が入るという。

ここの農場付近での、年間降雨量は平均300ミリ、最高で700ミリ。土地の単価は1ヘクタール当たり8,000～9,000米ドルで、水利権を買わなければならない。

婦気さんの農場はサンチアゴから北西方向に50キロ、海岸山脈の麓の農業地帯にある。

ハウスは松の木で作られており、1本2.5メートルで2～3米ドルだといわれている。この木材は、チリ南部の森林業者から購入している。

灌水の仕方は、日本の水田方式とでもいおうか、水口を開けたり閉じたりして、畑に流しこむだけである。

菊の苗は、5人共同の育苗圃場が、この農場から10キロほど離れたところにあり、そこから持ってくるという。

作業の分業化上、1つの農家が育苗という部門を担当するのは理解できるが、数戸の農家が集まって共同育苗場を作る意義は何なのか。おそらくチリの日系人は、数10キロごとに散在しているため、何かを求めて共同経営しようという意識と、日系人が少ないという危機感がベースになっているのであろう。

ブラジルの日系人はコロニアを形成しているので、その中での安心感がある。また、ブラジル日系人同士の共同経営は、自分に近い人で行い、自らの経営の欠点を補ってもらおうとするため、甘さが出やすい。

その点、チリの日系人の場合は「結合」しようという意識が強く、甘さを持ちたくても環境がそれを許さない。

18歳で単身アルゼンチンに渡り、同地で花卉栽培を何年か勉強してからチリに移転したという婦気さんは、単身で異郷に乗り込んで来た人だけに、不屈の精神力の持ち主であろう。

最初、私達に接する態度は冷たかったが、いろいろと話しているうちに私達の目的を理解してくれ、質問にもよく応えてくれた。花卉栽培者として成功された陰には、当然のことながら

大変な苦勞をしておられる。時間が経つうちに婦氣さんは涙ぐんできた。何10年も日本語で話したことがなかったのだそうだ。

再び曾根さんの事業について

花卉、あるいは蔬菜の種子会社がどうしてチリに進出して種子採集をやらないのか、進出しない理由がわからないくらいにチリは条件に恵まれている。加えて「これが同じ南米の人間か」と、驚くくらいにチリの人間はモラル、労働意欲、知識水準が高い。

曾根さん（兄弟）は、そのチリの自然、社会事情をふまえたうえで大規模な花卉の育種、採集事業をやっておられる。概要を書いて、今後にチリ訪問される方の参考にしたい。

チリは日本移民を正式に導入したことはない。ここに入国した外国移民は前世紀末から今世紀初めにドイツ人、イタリア人などヨーロッパ系ばかりである。

曾根兄弟の父君は昭和の初めに、東大農学部を卒業のあと、就職前に南米視察を試み、チリ南部のアンゴルという町にいる知人を訪ねた。

このことがきっかけとなり、一度日本に帰って結婚したのちにチリに永住したという。

その東大農学部出身者の息子さんたちだけに、何とはなく花卉にひかれて種子採取などの業種に入りこんだものらしい。

サンチアゴからパンアメリカン道路で北へ100キロのところにイフエラという町がある。ここが根拠地で3カ所の農場を持つ。さらに北部のペルー国境に近いアリカ市近郊にも1農場あるとのことだった。

曾根さんの主作物は「パンジー」。これが全栽培面積（3農場でのハウス面積8万平方メートル、アリのカの農場のハウス面積2万平方メートル）の約80%を占めている。

このパンジーは鉢物として出荷されるのではなく、全鉢人工交配させ、その種子が採取されて日本のS種子会社に納入されている。参考までに、この種子採取は5年前から始めたものなのである。人工交配には人手を要するので、この曽根農場の9月から翌年3月までの期間の就労者数は、1日平均500名とのことだった。

もっとも、曽根(兄)さんの農場は、パンジーのほか国内市場向けの観葉植物も手がけている。チリは、近ごろ政治が若干混乱しているとはいえ、住民の民度は南米とは思えぬほどに高い。そのため人口は1,200万人と少ないものの、市場規模は相当なものようである。

自社内にメリクロン設備を所有して、自社生産を行なっているが、苗の一部は外国から輸入している。

兄さんが生産し、それを弟さんが日本に輸出。弟さんの方はチリで著名な造園技師でもあり、その作品も多いという。

※ 本稿はアグロ・ナッセンテ出版の許可を得て「アグロ・ナッセンテ」1990年5、6月号(第51号)の記事中、「見たまま感じたまま、チリの花弁事情」(筆者 藤川 幸久氏)を転載、また、同誌1990年3、4月号(第50号)のうちの関係記事も◆◆◆◆下に併せ引用させていただいた。

◇◇◇◇◇「海外農林業開発協力促進事業」制度のご案内◇◇◇◇◇

民間企業ベースで農林業投融資を支援

- (1) 本事業は、開発協力事業の推進等本邦民間企業の農林業分野における海外投資を促進することを目的として、昭和62年度から(社)海外農業開発協会が実施している農林水産省の補助事業です。
- (2) 本事業の概要及び適用事例については右の図に示したとおりで、貴社でご検討中の発展途上国における農林業開発事業についてのご相談に応じることができます。
- (3) 民間企業のメリットとなる本事業の特徴は以下のように整理できます。
 - ① 海外農業開発協会のコンサル能力を利用できる。
 - ② 現地調査経費、国内総括検討などにかかる経費を節減できる。(1/2補助)
 - ③ 本事業の調査後、開発協力事業等政府の民間融資制度を利用する場合には、その事務がスムーズに進む。
- (4) 本事業による調査後、当協会は貴社のご要請に応じて、政府系融資資金の調達のお手伝いをします。
- (5) なお、平成元年度の本事業による調査実績は次のとおりです。

1) 南米加工用野菜生産事業調査	6) フィリピン植物性精油生産事業調査
2) 南西アジア油糧作物生産事業調査	7) インドネシアチップ生産事業調査
3) タイ国うるし生産事業調査	8) ネパール加工花生産事業調査
4) フィリピン粗飼料生産事業調査	9) アルゼンティンパルプ生産事業調査
5) ラオス野菜生産事業調査	10) インドネシア野菜種子生産事業調査

相談窓口：(社) 海外農業開発協会

第一事業部

TEL 03-478-3508

農林水産省

國際協力課開發協力班

TEL 03-502-8111 (内線 2776)

民間企業・団体

海外における農林業投資案件の検討

(例1)

農作物の栽培事業の実施に当たって対象作物、対象地域等企業内における基礎的検討が必要

(例2)

農畜作物の生産・輸出事業の実施に当たって、当該品目について栽培～加工～流通まで広範な領域についての検討が必要

(例3)

現地関連法人から遊休地の有効利用について協力依頼を受けており、農林業開発の可能性の検討が必要

(例4)

企業内において農業開発の方向性が定められており、詳細な事業計画の策定が必要

海外農林業開発協力促進事業

(農林水産省補助事業、補助率：1/2)
(社団法人 海外農業開発協会が実施)

農林業投資案件の発掘・形成

1. 現地調査 (当該企業・団体の参加も可)

2. 国内検討 (専門家による検討)

↓
調査報告書

調査経費の負担

国内検討、現地調査及び報告書作成にかかる総経費の1/2を補助

資金調達先

JICA
(開発協力事業)

OECF

輸 銀

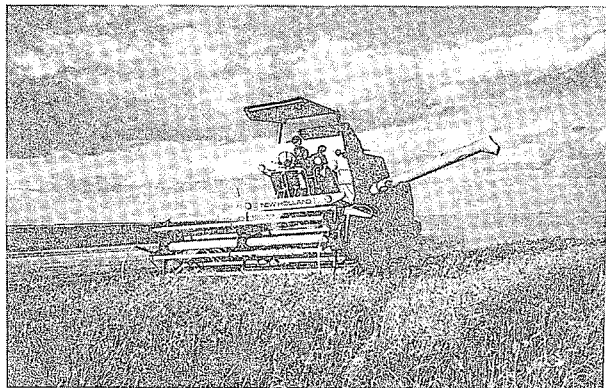
その他

総合農業雑誌

アグロ・ナッセンテ

AGRO-NASCENTE

ブラジルで発行されている
日本語の農業雑誌!!



南米の農業が
次第に注目されてきました。

従来のコーヒー、カカオ、オレンジ、大豆などの他に、熱帯から温帯までの多くの作物が生産されるようになったからです。

南米の農業情報は、日本語唯一の専門誌「アグロ・ナッセンテ」誌で—

EDITORIA AGRO-NASCENTE S.A.
R. Miguel Isasa, 536 - 1º - S/ 13, 14, 15
CEP 05426 São Paulo Brasil

(日本でのお申込み先)

日本農業新聞サービス・センター
東京都台東区秋葉原2番3号
Tel.: 257-7134

—— 編 集 部 よ り ——

当誌「海外農業開発」の前月号(1990年7月、8月合併号)で、奥付けを欠落しました。こころよりお詫び申し上げます。

海外農業開発 第163号 1990. 9. 15

発行人 社団法人 海外農業開発協会 橋本栄一 編集人 小林一彦

〒107 東京都港区赤坂8-10-32 アジア会館

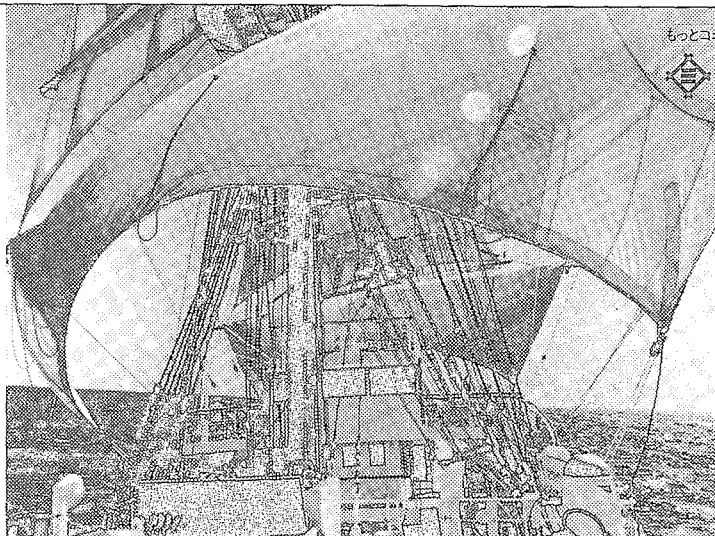
TEL(03)478-3508 FAX(03)401-6048

定価 200円 年間購読料 2,000円 送料別

印刷所 日本印刷(株)(833)6971

もっとコミュニケーション、世界の心へ。

三井物産

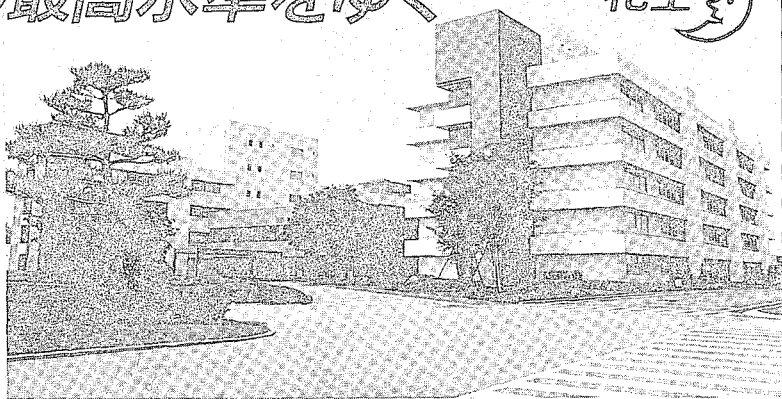


時代を超え、国境を超えて 礎^{もと}もの。

さまざまな人種。いろいろな言葉。気候風土も違えば、習慣にも隔たりがある。そんな国々が多数集まった偉大なる寄り合い所帯、地球。

その地球を舞台に活動する私達商社マンの使命は、人種や国の大小、経済レベルの違いを超えて、そのひとつひとつの国々のニーズや価値観を理解して経済活動を手助けすることです。それが、信頼を確保し、繁栄を分かちあい、ともに地球の一員としての限りない未来を着実に築いていける途と考えています。

化学工業の最高水準をゆく——花王^{カガク}



◎清潔な暮らしに…家庭用製品

石けん、洗顔料、全身洗浄料、シャンプー、ヘアリンス、ブラッシング剤、トリートメント、ヘアスプレー、ヘアブラシ、ヘアカラー、顔・ボディ用クリーム、スキンローション、ハンドクリーム、制汗・防臭剤、衣料用洗剤、食器用洗剤、クレンザー、住居用洗剤、柔軟仕上げ剤、漂白剤、帯電防止剤、糊剤、消臭剤、殺虫剤、歯みがき、歯ブラシ、生理用品、化粧品、紙おむつ、入浴剤、肛門清浄剤

◎産業の発展に…工業用製品

脂肪酸、高級アルコール、脂肪アミン、脂肪エステル、グリセリン、食用油脂、界面活性剤、食品乳化剤、繊維油剤、製紙薬剤、農薬助剤、プラスチック添加剤、帯電防止剤、コンクリート減水剤、潤滑油添加剤、鉄鋼洗浄剤、圧延油、不飽和ポリエステル樹脂、ポリウレタン樹脂、複写機用トナー、フロッピーディスク

栃木研究所

花王株式会社

〒103 東京都中央区日本橋茅場町1-14-10

海外農業開発

第 163 号

第3種郵便物認可 平成2年9月15日発行

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS